

(有)セラムファーム 代表取締役

## 道家徹司さん

## 明日へ向かって駆ける

農業法人の経営者は語る

「耕作放棄地を活用したい、冬の間の仕事を確保したいと思ったのが会社を立ち上げるきっかけだった」と話すのは、京丹後市弥栄町で(有)セラムファーム代表取締役を務める道家徹司さん(57)。同市丹後町岩木地区の農地で、九条ねぎを経営の柱に多種類の野菜や水稻の生産に取り組み。また、農業経営とは別の会社で、先代が経営していた屋根工事業を引き継ぎ、現在、従業員を15人抱える屋根工事業会社(有)ラムも経営している。

2009年の設立当時、「景気が悪い時期が続く、冬の間の仕事確保に農業はできないか、実家の農地の隣にできた耕作放棄地をどうにかできないかと考えていた」と道家さんは話す。そこで、府に相談したところ、法人化することで耕作放棄地を活用するのに補

助が受けられると聞き、近隣の耕作放棄地を活用して農業を始めようと同社を設立した。

岩木地区は、京丹後市北部に位置する日本海に近い農村地帯に30畝の農地が広がり、そのうち同社は2・8畝の農地を預かっている。

設立時は祖父が持っていたビニールハウス2棟から始めたが、同地区内の耕作放棄地を集積し、現在ではビニールハウスを29棟にまで増やした。ビ

ニールハウスでは九条ねぎを周年栽培し、J A京都や地元スーパーに出荷する他、地元の小・中学校の給食用にも出荷する。また、市内の国営開発農地70㍎に、堀川ごぼう、プロッコリー、ハクサイ、一本ねぎなどの多品目の野菜を栽培し、J A出荷を通じてJ Aとの関係を深めている。

しかし「当初は、農業のプロがおらずうまくいかなかったが、5、6年試行錯誤を繰り返して、ようやく軌道に

乗ってきた」と道家さんは話す。先進地を視察してさまざまな技術を学び、農業用マルチシートを使い雑草を減らすなど省力化に努めたことが、経営の安定化につながっている。今後は、み

ず菜など経営の柱になる新たな品目を増やすことで経営基盤の強化につなげる予定だ。

「地元は高齢化が進み5、6年後には農家も減少する。幸いにも、息子が京都府立農業大学校を卒業し、現在も農業に携わっていることから、将来は経営を継いでくれることを期待している」と道家さん。

「農業だけで食べていけるような経営が出来ないと地元の農業が続かない。また地元で雇用を生み、子どもたちが地元に残ってもらえるように励みたい」と、今後の農業への思いを語った。



▶九条ねぎを経営の柱にする道家さん

## 放棄地活用し多品目

■法人所在地 京丹後市弥栄町吉沢222。(電)0772(65)40280。

■法人概要 09年設立。役員2人、監事1人、アルバイト2人。経営面積 九条ねぎ栽培用ハウス29棟1・5畝、「コシヒカリ」70㍎、「ミルキークイーン」50㍎、国営開発農地70㍎(堀川ごぼう、プロッコリー、ハクサイ、一本ねぎなど)。農業機械 トラクター2台、畝立機1台、ネギ調整機1式。